

【資料】

食物アレルギーをもつ乳幼児の母親の思いに関する文献検討

西山 楓香*1 宮野 真実*1 高間木 静香*2 橋本 美亜*2 扇野 綾子*2

2024年3月26日受付, 2024年9月23日受理

要旨: 食物アレルギーをもつ乳幼児の母親の思いに関して、13件の文献を対象として文献検討を行った。母親の思いに関する記述を抽出し分類した結果、【疾患に関する思い】、【食生活に関する思い】、【食物傾向負荷試験への思い】、【アドレナリン自己注射に関する思い】、【子どもへの対応に関する思い】、【集団生活に関する思い】、【協力体制に関する思い】の7つにカテゴリーに分類された。また、感情の内容で分類すると“不安”が最も多く、次いで“困難感”、“要望”、“安心感”、“負担感”の順に多かった。食物アレルギーをもつ乳幼児の母親は、疾患の症状や検査、治療に対する思いのほか、食生活での困難感や負担感、集団生活への不安といった様々な思いを抱えていた。母親に対する支援として、疾患に対する不安を軽減させる関わりや、情報提供や相談対応の強化、保育施設や周囲の人に対する支援体制の強化などといった支援が必要であると考えられる。

キーワード: 食物アレルギー, 乳幼児, 母親の思い, 文献検討

I. はじめに

アレルギー疾患に関する3歳児全都調査¹⁾によると、食物アレルギーの有病率は増加傾向にあり、1999年では全体の7.9%であったのに対し、2019年には14.9%まで増加している。今井ら²⁾の報告によると、食物アレルギーで医療機関を受診した患者の年齢構成は0歳児が31.5%と最も多くを占め、加齢と共に減少するが、6歳以下が80.5%を占めている。食物アレルギー児は、食生活の制限が必要となることや、重篤なアナフィラキシーショックを引き起こす可能性があることから、本人およびその家族の生活に影響を及ぼし心理的な負担も大きいと考えられる。

育児期にある母親の育児ストレスについて、手島ら³⁾によると、一般的に乳幼児期の子どもをもつ母親は育児ストレスが高く育児不安を抱きやすいとされているが、食物アレルギーをもつ乳幼児の母親は、よりストレスを感じていると推察する。立松ら⁴⁾の先行研究では、食物アレルギーをもつ児を療育する母親は、アレルギーを持つ我が子への心配が大きいことや複数品目の除去食があることなどの原因によって、育児ストレスを抱えやすいことが明らかにされている。

2015~2024年を対象期間とする「健やか親子21(第2次)」⁵⁾では、「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」を

重点課題として設定し、親や子どもの多様性を尊重し、それを支える社会の構築を目標としている。育てにくさを感じる要因は様々であると推測されるが、食物アレルギーなどの疾患をもつ児を養育する親も、育てにくさを感じると推測され、寄り添った支援が課題となる。

食物アレルギー児をもつ母親に関する先行研究の動向について検討した鈴木らの研究⁶⁾では、食物アレルギーをもつ児の母親は「食生活の困難・負担」、「不安」、「ストレス」、「疲労」といった問題を抱えていることが明らかにされ、2013年に発表されている。食物アレルギーに関しては、前述した有病率の増加のほか、近年幼児期の木の実類アレルギーが増加していることが示されている⁷⁾。2015年にはアレルギー疾患対策基本法が施行され、アレルギー疾患の予防と症状の軽減として、知識の普及と生活環境の整備、アレルギー疾患を有する者の生活の質の維持向上などが基本的施策として定められた⁷⁾。また、これに基づき2019年には保育所におけるアレルギー対応ガイドラインが改定され、アレルギーをもつ乳幼児への保育所における対応や連携体制などが強化されている⁸⁾。以上のように、乳幼児期における食物アレルギーの実態や、児やその家族に対する社会的対応の変化が、食物アレルギー児の母親の心理や支援に影響を与えている可能性が推察される。

そこで、日本における近年の研究から、母親の思いに関する研究の動向を調査し、その支援や今後の研究の方向性を検討したいと考えた。本研究では、食物アレルギーをもつ乳幼児の母親が抱える思いに関する研究の現状を明らかにし、今後の支援の課題や研究の方向性を検討することを目的とする。この検討から、母親の思いに寄り添ったより効果的な支援の検討につなげることが期待できる。

*1 弘前大学医学部保健学科
Hirosaki university School of Health Sciences
〒036-8564 青森県弘前市本町66-1 TEL:0172-33-5111
66-1, Honcho, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8564, Japan

*2 弘前大学大学院保健学研究科
Hirosaki university Graduate School of Health Sciences
〒036-8564 青森県弘前市本町66-1 TEL:0172-33-5111
66-1, Honcho, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8564, Japan

Correspondence Author takamagi@hirosaki-u.ac.jp

II. 対象と方法

1. 論文の収集と分析対象の選定

本研究では、医中誌 Web および CiNii Research を用いて対象となる文献を検索し、その結果を分析した。2013 年～2022 年の過去 10 年間に発表された文献について、「食物アレルギー」AND「母親 OR 保護者」AND「思い OR ストレス OR 心理」というキーワードを組み合わせて検索した。該当した 161 件のうち、重複文献を除外した 68 件について内容を確認し、乳幼児期以外の発達段階の小児を主な対象とする文献、母親の心理や母親への支援についての言及がない文献、尺度の検討に関する文献、一事例のみを対象とした症例報告、文献レビュー、学術論文ではない文献を除外し、13 件を分析対象とした。文献の検索過程を図 1 に、対象文献の概要を表 1 に示した。なお、一部の文献では、

食物アレルギーを「FA」(Food allergy) と記載しているものもあり、本論文で引用の際は原文のまま記載している。

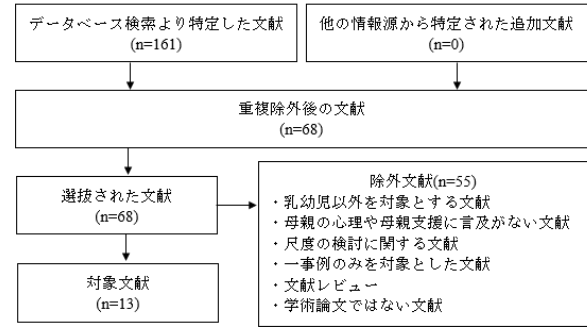


図 1 文献検索過程

表 1 対象文献の概要

番号	タイトル	筆頭著者	発表年	出典	研究の種類	対象者
1	Tentative development of a psychoeducational program for alleviating psychological burden of mothers of young children with milk allergy	Mizuho Konishi	2019	Journal of Health Psychology Research	量的研究	A 病院アレルギー科の外来に定期的に通っている牛乳アレルギー児の母親 6 名
2	食物アレルギー児を持つ保護者の食生活上の心配・悩みに対する管理栄養士の栄養指導	佐藤誓子	2015	体力・栄養・免疫学雑誌	量的研究	保育所、幼稚園に在籍する児童の保護者のうち、医師によって食物アレルギーと診断されている児童を持つ保護者 (73 名) と過去に食物アレルギーと診断されていた児童を持つ保護者 (86 名) の計 159 名
3	食物アレルギー児の母親における育児ストレスとインターネット上の食物アレルギー情報に対する満足度に関する研究	國武加奈	2022	障害科学研究	量的研究	茨城県南に位置する日本アレルギー学会アレルギー専門医教育研修施設に認定されている病院の小児科外来に来院した、0～12 歳の食物アレルギー患者の母親 77 名
4	食物アレルギーのある乳幼児をもつ母親の育児ストレス	弓気田美香	2017	小児保健研究	量的研究	神奈川県内にある総合病院小児科・小児アレルギー科外来において、食物アレルギーと診断され受診目的にて来院した 0～5 歳の子どもの母親 199 名
5	食物アレルギー児の母親の悩みの傾向	村田勝吾	2018	奈良県西和医療センター医学雑誌	量的研究	食物アレルギーを持つ子どもの母親 6 名
6	食物アレルギーを有する子どもを養育する母親の Quality of life に関する検討	秋鹿都子	2015	日本小児アレルギー学会誌	量的研究	0～6 歳の FA 群の母親 280 名と、食物アレルギーを有さない子ども(非 FA 群)の母親 187 名
7	経口免疫療法の治療過程における食物アレルギーの子どもの母親への支援	橋本美穂	2018	医療看護研究	質的研究	データ収集施設の小児科アレルギー外来に通院している OIT を行っている FA の子どもの母親 5 名
8	食物アレルギー患児をもつ養育者の不安悩みと外来栄養指導後の解消	松谷智子	2018	日本小児臨床アレルギー学会誌	量的研究	食物アレルギー患児をもつ養育者 (おもに母親) 103 名
9	外来で食物経口負荷試験を受ける子どもの母親の不安に影響を与える要因	玉村尚子	2014	日本看護学会論文集: 小児看護	量的研究	A 県の特定機能病院小児外来で負荷試験を受ける子どもの親(母親)28 名
10	当院で導入開始した食物経口負荷試験に関する保護者への意識調査	羽切理恵	2016	日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌	量的研究	2013 年 4 月から 2014 年 3 月の 1 年間に当院にて 1 泊 2 日による入院 OFC(食物経口負荷試験)を施行した児の保護者 168 名
11	1 歳児を対象にした食物除去の実態調査	西村龍夫	2019	日本小児アレルギー学会誌	量的研究	2014 年 10 月～2014 年 12 月の 3 か月間、65 施設の小児科外来において、麻しん風しん混合ワクチン 1 期の接種を目的に受診した 1 歳児の保護者 725 例
12	外来で食物負荷試験を受ける子どもの親のニーズに関する実態調査	鈴木真実	2017	国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター医学雑誌	量的研究	平成 27 年 8 月 1 日～10 月 31 日の間に A 病院小児アレルギー外来で負荷試験を実施した子どもの親 23 名(母親 21 名、父親 2 名)
13	アドレナリン自己注射薬を所持する子どもの実態調査	飯村万理恵	2015	日本看護学会論文集: 慢性看護	量的研究	アレルギー外来を受診する、アドレナリン自己注射薬を所持する 12 歳までの子どもの保護者 36 名(母親 33 名、父親 3 名)

2. 分析方法

分析対象とした13文献について、タイトル、著者、誌名、発行年、対象、方法、調査内容、結果等を整理した。本文を熟読したのち、食物アレルギーをもつ児の母親の思いに関する記述をそれぞれ抜き出し、コードとした。母親の思いとして抜き出したコードについて、思いの内容に着目して分類した。また、コード内容の類似性と相違性に基づいて、類似したコードをまとめてサブカテゴリーとし、さらにサブカテゴリーのまとまりの抽象度を高めてカテゴリーとした。本論文中では、カテゴリー名を【】、サブカテゴリー名を<>、コードを「」で示した。分析結果の信頼性の確保のため、研究者間で分類に相違がないことを繰り返し確認した。

3. 倫理的配慮

文献を取り扱うにあたり対象となる文献をすべて収集し、文献に記載されている内容を忠実に要約・反映させた。また、論文の著作権を侵害することがないように留意した。

III. 結果

1. 抽出された母親の思い

対象文献を分析した結果、食物アレルギーをもつ児を養育する母親の思いについて、115のコードが抽出された。

抽出された115コードの内容について、母親の感情別に分類した結果、“不安”に関する内容が38コードと最も多く、次いで“困難感”に関するコードが27コード、“要望”が25コード、“安心感”9コード、“負担感”6コード、“恐怖”4コード、“申し訳なさ”2コード、“期待感”2コード、“抵抗感”1コード、“緊張”1コードと続いていた(図2)。

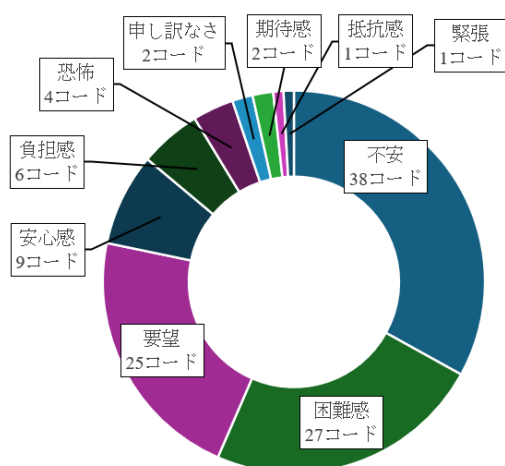


図2 感情の種類で分類した母親の思い

2. 食物アレルギー児を育てる母親が抱いた思いに関するカテゴリー分類

抽出された115のコードについて、コード内容の類似性

と相違性に基づいて分類した結果、45のサブカテゴリーに分類された。さらに抽象度を高めて分類した結果、【疾患に関する思い】、【食生活に関する思い】、【食物経口負荷試験への思い】、【アドレナリン自己注射に関する思い】、【子どもへの対応に関する思い】、【集団生活に関する思い】、【協力体制に関する思い】の7カテゴリーに分類された(表2)。各カテゴリーの詳細について以下に示す。

1) 【疾患に関する思い】

7サブカテゴリー、21コードが抽出された。

食物アレルギーをもつ児の母親の多くは、「アレルゲンを食べる怖さ」や「アナフィラキシーを起こすかも知れない緊張感と覚悟」など、<アレルギー症状の出現に対する不安や恐怖>を抱えている。このような不安や恐怖に関連して、「食物アレルギーの子どもから離れることの怖さ」「症状出現時の対処方法」といった<アレルギー症状の対処に関する不安>を感じていた。また、「いつまで続くのか不安になる」、「治療経過(治るかどうか)への不安」などの<今後に関する不安>や、「ほかの病気発症への不安」、「子どもの心理的影響への不安」、「子どもの身体的発達への不安」といった<アレルギーによる健康への影響に関する不安>があった。アレルギーを持った子どもに対して、「子どもが痒がって赤みが強いときは自分のせいで本当に申し訳ない気持ちで一杯」といった<子どもに対する申し訳なさ>を抱えていた。さらに、「アレルギーを診ることのできる医師がどこにいるのかわからない」「医療機関からの情報が少ない」という<情報提供が少ないことへの困難感>や、「インターネット情報は信頼性が不確かなものもあるため、信頼できるウェブサイトを教えてください」という<情報収集の困難感>も感じていた。

2) 【食生活に関する思い】

14サブカテゴリー、27コードが抽出された。

食物アレルギーをもつ児の母親は、原因食物を除去しなければならず、「同じメニューになる」、「献立がマンネリ化してしまう」など<献立がワンパターンになる困難感>や、「家族と別メニューが必要」、「買い物や調理に余分な時間が掛かる」などの<除去食を作ることへの負担感>、「食費が余分に掛かる」という<経済的な負担感>を抱えていた。市販食品の使用に関しては、「市販の惣菜・加工食品が使用できない」、「原材料についての表示がよくわからない」などの<市販食品が使用できない困難感>や、「市販のアレルギー対応食品の安全性」といった<市販のアレルギー対応食品への不安>、「代替食材の選択、購入方法がわからない」、「代替食品の調理、利用方法がわからない」といった<代替食材の使用に関する困難感>を感じていた。また、「栄養不足になる」「必要な栄養が摂れているかどうか。栄養が偏っていないか不安」などという<栄養の偏りへの不安>、「離乳食をどのように進めてよいかわからない」という<離乳食への不安>を抱えていた。さらに、家庭での食生活

における子どもとの関わりについては、「子どもが自分の料理をあまり食べてくれない」という＜子どもが自分の料理を食べない困難感＞や、「偏食によるアレルギー摂取を進めることへの困惑」、「繰り返し同じものを食べることに對する子どもの飽きへの困惑」などといった＜食事療法に対する困難感＞を感じていた。外食に関しては、「外食ができない」などの＜外食への困難感＞や、「外食時に食事を持参しなければならない」といった＜外食時に食事準備することに対する困難感＞、「外食をする際にアレルギーの混入がないか」といった＜外食先での誤食に対する不安＞などの思いを抱えていた。これらの食生活の思いから、「外食や宿泊先における食物アレルギーの対応に関する情報が欲しい」、「アレルギーのある子どもの食事について知りたい」という＜アレルギーに対応した生活についての情報提供の希望＞を持っていた。

3) 【食物経口負荷試験に関する思い】

6 サブカテゴリー, 30 コードが抽出された。

＜負荷試験を受ける動機＞としては、「どこまで食べることができるか知りたい」、「集団生活を送る上での不安」があった。＜負荷試験における心配＞には、「アレルギー症状」、「本人の心理面が心配」、「終了時症状がなく、病院を出てから症状が出るのではないか」、「症状出現時に自分が冷静に対応できるか」などといった症状出現やその時の対応、子どもの心理面への不安があった。その一方で「病院で行うので心配していない」という思いもあった。そして、＜負荷試験前の思い＞としては、「集団生活前に少しでもアレルギーの解除をしておきたい」、「子どもが現在どこまで摂取できるのか知りたい」、「食事に対する負担が減ってほしい」、「負荷試験を受ける前の不安がある」などの思いを抱えていた。一方で＜負荷試験後の思い＞では、「病院で行うので安心して受けることができた」、「食べられたことで次のステップへの期待となった」という前向きな思いを持っていた。また、＜負荷試験前の情報提供の希望＞については「食物アレルギー症状について」、「持参する食品の準備の仕方」、「抗アレルギー薬について」、＜負荷試験後の情報提供の希望＞については「学校での生活の仕方」、「家庭での負荷の進め方」、「食物アレルギー症状出現時の対処方法（を知りたい）」などがあった。

4) 【アドレナリン自己注射に関する思い】

5 サブカテゴリー, 6 コードが抽出された。

アドレナリン自己注射薬を「所持しておくことで安心」、「お守りとして所持している」といったように＜注射薬を所持しておくことによる安心感＞や、「早く打って助かってほしい」といった＜注射薬への期待感＞などのポジティブな感情があった。一方で、「できれば使いたくない」という＜使用することへの抵抗感＞や、「持ち物としてかさばる」という＜注射薬の持ち運びへの負担感＞、「偏見になっていると思うが念のため持たせている」といった＜注射に對す

る偏見への不安＞などのネガティブな思いを抱えていた。

5) 【子どもへの対応に関する思い】

4 サブカテゴリー, 5 コードが抽出された。

食生活に関して、「大人の食べるものを欲しがりが食べさせることができない」などの＜子どもが食べたいものを食べさせられない困難感＞や、「子どもには食べることができない理由がわからない」という＜子どもへの説明に対する困難感＞といった思いを抱えていた。また、「食物アレルギーの子どもの子育てへの不安」という＜子育てへの不安＞や、「牛乳アレルギーのない兄弟への適切な対応方法について知りたい（他の母親と相談したい）」という＜きょうだいへの対応方法についての情報提供の希望＞があった。

6) 【集団生活に関する思い】

5 サブカテゴリー, 17 コードが抽出された。

子どもが保育園や幼稚園などに通い集団生活を送る中で、母親は「友達と同じ物が食べられない」、「園などの行事でみんなと同じものが食べられずかわいそう」など、＜他人と同じものを食べられないことへの困難感＞を感じていた。また、「集団生活をおくるうえで不安」という＜集団生活への不安＞や、「保育園や学校での対応が気になる」、「園・学校に行くとき親の目が届かないため不安」、「食物アレルギーのため入園手続きが困難な現状」などといった＜園や学校の対応に対する不安＞、そして「アレルギー食品が園や学校で混入しないか」、「集団生活での誤食が心配」などの＜集団生活での誤食に対する不安＞といったような不安を持っていた。さらに、「保護者や他の子どもたちとの集団生活で気をつけることを知りたい。（他の母親と相談したい）」、「孤立しそうな不安と同じ病気の子どもの母親の話を知りたい」といった＜集団生活に関する情報提供の希望＞を持っていた。

7) 【協力体制に関する思い】

4 サブカテゴリー, 9 コードが抽出された。

「家族以外の理解・協力が得られない」、「家族の理解・協力が得られない」、「子どもを他者に預けることへの不安」といったように＜周囲の理解・協力が得られないことへの困難感＞を感じていた。反対に、「夫はよく協力してくれる」、「友人は子どものアレルギーを理解し協力してくれている」、「義母・義父も協力してくれるので助かる」といったように十分な協力体制があると＜周囲が理解・協力してくれることへの安心感＞を感じていた。また周囲の人との良好な関係によって、「看護師が話を聞いてくれてスッキリした」、「誰かに話すことですっきりする感じがあった。」という＜周囲の人との関わりから得た思い＞を持っていた。そして、「我が子のミルクアレルギーを他の人に伝える方法が知りたい（他の母親と相談したい）」という＜周囲の人への伝え方に関する情報提供の希望＞もあった。

表2 食物アレルギー児を育てる母親が抱いた思いに関するカテゴリー分類

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献番号
疾患に関する思い	アレルギー症状の出現に対する不安や恐怖	アレルギーが怖い	12
		アナフィラキシーを起こすかもしれない緊張と覚悟	8
	アレルギー症状の対処に関する不安	母乳を介して症状が出現するのは不安	9
		誤って原因食物を摂ることの不安	2
	アレルギーによる健康への影響に関する不安	誤食時の母親の迷いと難しさ	8
		アレルギーを食べる怖さ	8
	今後に関する不安	アレルギー食品を間違っって食べないか不安	9
		食物アレルギーの子どもから離れることの怖さ	8
	子どもに対する申し訳なさ	症状出現時の対処方法を知りたい	11
		子どもが自分でアレルギーを対処する方法を知りたい	1
情報提供が少ないことへの困難感	ほかの病気発症への不安	4	
	子どもの心理的影響への不安		
情報収集の困難感	子どもの身体的発達への不安		
	いつまで続くのか不安になる	2	
子どもに対する申し訳なさ	治療経過（治るかどうか）への不安	4	
	アレルギー食品が将来食べられるようになるか	9	
情報提供が少ないことへの困難感	自分のせいでこうなったのかなと子どもに申し訳なかった	8	
	子どもが痒がって赤みが強いときは自分のせいで本当に申し訳ない気持ちで一杯		
情報収集の困難感	アレルギーを診ることのできる医師がどこにいるのかわからない	3	
	医療機関からの情報が少ない	11	
子どもが自分の料理を食べない困難感	インターネット情報は信頼性が不確かなものもあるため、信頼できるウェブサイトを教えてほしい	3	
	子どもが自分の料理をあまり食べてくれない	1	
献立がワンパターンになる困難感	同じメニューになる悩み	2	
	献立がマンネリ化してしまう悩み	9	
栄養の偏りへの不安	献立がワンパターン悩み	11	
	栄養不足になるのではないかと不安	2	
除去食を作ることへの負担感	必要な栄養が摂れているかどうか、栄養が偏っていないかと不安	9	
	家族と別メニューが必要	12	
経済的な負担感	買い物や調理に余分な時間が掛かる	2	
	除去食を作ること	2	
市販食品が使用できない困難感	食費が余分に掛かる	4	
	市販の惣菜・加工食品が使用できない	2	
市販のアレルギー対応食品への不安	買ったものを食べることができない	5	
	原材料についての表示がよくわからない	9	
食事療法に対する困難感	市販のアレルギー対応食品の安全性が気になる	2	
	偏食によるアレルギー摂取を進めることへの困惑		
離乳食への不安	繰り返し同じ物を食べることに子どもの飽きへの困惑	8	
	偏食のため治療が進まない現状への困惑		
代替食材の使用に関する困難感	離乳食をどのように進めてよいかわからない	9	
	代替食材の選択、購入方法がわからない	9	
外食への困難感	代替食材の調理、利用方法がわからない	9	
	外食ができない	2	
外食時に食事準備することに対する負担感	外食に関すること	4	
	外出時に食事を持参しなければならない	5	
アレルギーに対応した生活についての情報提供の希望	外食先での誤食に対する不安	9	
	外食や宿泊先における食物アレルギーの対応に関する情報が欲しい	3	
アレルギーのある子どもの食事について知りたい	どこまで食べることができるか知りたい	1	
	集団生活を送る上での不安がある	5	
アレルギー症状に対する心配	アレルギー症状に対する心配		
	アナフィラキシーショックに対する心配		
本人の心理面が心配	症状が出ないか心配	10	
	どのような反応が出るか心配		
最終まで食べられるか心配	最終まで食べられるか心配		
	終了時症状がなく、病院を出てから症状が出るのではないかと		
症状出現時に自分が冷静に対応できるか	症状出現時に自分が冷静に対応できるか		
	病院で行うので心配していない		
集団生活前に少しでもアレルギーの解除をしておきたい	子どもが現在どこまで摂取できるのかを知りたい	13	
	食事に対する負担が減ってほしい	11	
小学校に入るまでに給食が食べられるようになってほしい	大人になるまでに少しでも不安を減らしておいてあげたい	8	
	負担試験を受ける前の不安がある		
食べられるようになる期待と恐怖	病院で行うので安心して受けることができた	13	
	食べられたことで次のステップへの期待となった		
食物アレルギー症状について	持参する食品の準備の仕方	13	
	抗アレルギー薬について		
負担試験前の情報提供の希望	負担試験を含む全体の流れ		
	食物アレルギー症状の出現時の対処方法（を知りたい）		
学校での生活の仕方	家庭での負担の進め方	13	
	毎日の食事の作り方		
食物アレルギー症状出現時の対処方法（を知りたい）	食物アレルギー症状出現時の対処方法（を知りたい）		
	誤食をしてしまったときの対処法（を知りたい）		

(表2 続き)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献番号
アドレナリン自己注射に関する思い	注射薬を所持しておくことによる安心感	所持しておくことで安心 お守りとして所持している	14
	注射薬への期待感	早く打って助かってほしい	14
	使用することへの抵抗感	できれば使いたくない	14
	注射薬の持ち運びへの負担感	持ち物としてかさばる	14
	注射に対する偏見への不安	偏見になっていると思うが念のため持たせている	14
子どもへの対応に関する思い	子育てへの不安	食物アレルギーの子どもの子育てへの不安	8
	子どもへの説明に対する困難感	子どもは食べることができない理由がわからない	5
	子どもが食べたいものを食べさせられない困難感	大人の食べる物を欲しがることが食べさせることができない 子どもが食べたがるが、食べさせることができない	5
	きょうだいへの対応方法についての情報提供の希望	牛乳アレルギーのない兄弟への適切な対応方法について知りたい(他の母親と相談したい)	1
集団生活に関する思い	他人と同じものを食べられないことへの困難感	友達と同じ物が食べられない 他人と同じものを食べることができない 周囲のものと同じものが食べられない 園などの行事でみんなと同じものが食べられずかわいそう	2 5 11 14
	集団生活への不安	集団生活をおくるうえで不安	4
	園や学校の対応に対する不安	保育園や学校での対応が気になる	5
		園や学校での対応	11
		園・学校に行くとき親の目が届かないため不安	14
		幼稚園・保育所との連携	14
	園や学校の対応に対する不安	園・学校のアレルギーに対する知識が低いと感じる	4
		食物アレルギーのため入園手続きが困難な現状 もっと病院は、園や学校と連携を持ってほしい	8 14
	集団生活での誤食に対する不安	アレルギー食品が園や学校で混入しないか 集団生活での誤食が心配 将来の給食が心配である	9 11 2
	集団生活に関する情報提供の希望	保護者や他の子どもたちとの集団生活で気をつけることを知りたい。(他の母親と相談したい) (孤立しそうな不安から) 同じ病気の子どもの母親の話を知りたい	1 8
協力体制に関する思い	周囲からの理解・協力が得られにくいことへの困難感	家族以外の理解・協力が得られない 家族の理解・協力が得られない 子どもを他者に預けることが不自由	4 4 6
	周囲が理解・協力してくれることへの安心感	夫はよく協力してくれる 友人は子どものアレルギーを理解し協力してくれている 義母・義父も協力してくれるので助かる	5
	周囲の人への伝え方に関する情報提供の希望	我が子のミルクアレルギーを他の人に伝える方法が知りたい(他の母親と相談したい)	1
	周囲の人との関わりから得た思い	看護師が話を聞いてくれてスッキリした 誰かに話すことですっきりする感じがあった。	5 8

IV. 考察

1. 食物アレルギーを有する母親の思いと必要な支援

食物アレルギーをもつ乳幼児の母親は、【疾患に関する思い】、【食生活に関する思い】、【食物経口負荷試験に関する思い】、【アドレナリン自己注射に関する思い】、【子どもへの対応に関する思い】、【集団生活に関する思い】、【協力体制に関する思い】など、種々の状況や経過において、様々な思いを抱いていた。

抽出されたコードを感情別に分類すると、“不安”に関するコードが最も多く、に関する内容が最も多く、次いで“困難感”や“要望”が多く挙げられていたことから、母親への支援の課題はまだまだ大きいと考えられる。以下、カテゴリー別に分類した母親の思いをもとに、食物アレルギーをもつ乳幼児の母親に必要な支援を考察する。

1) 【疾患に関する思い】に対する支援

食物アレルギーをもつ乳幼児の母親の多くは、アレルギー症状の出現に対する不安や恐怖、アレルギー症状の対処に関する不安を抱いていた。これは、誤食や発症時の症状対処によって日常の中で子どもに生命の危険が及ぶ可能性があることに影響した、食物アレルギーをもつ児の母親に特有の不安であると考えられる。宮城ら⁹⁾は、食物アレル

ギーをもつ児の母親は誤食による発症への不安を感じていることを示し、さらに秋鹿ら¹⁰⁾は、食物アレルギーをもつ児の母親の困難感の構成要素として、疾患・症状コントロール上の困難感があることを示している。また、前述したように、食物アレルギーの有症率は乳児期で最も高く、加齢と共に漸減する^{1,2)}。しかし、症状の改善や治療に関して、母親自身が具体的な見通しを立てることは難しいため、アレルギー疾患や症状出現に対する不安や、アレルギーによる健康への影響に関する不安を抱えている状況と考えられる。このような不安に関して、有瀧ら¹¹⁾は食物アレルギーをもつ児の母親は「いつまで除去しなければならないのか」という不安があったことを明らかにし、立松ら⁴⁾は「子どもの将来に対する不安」が育児ストレスを高めることを示している。このような母親が抱えている不安や恐怖とそれによるストレスは、今回の文献検討の対象期間より以前の文献を検討した鈴木らの研究でも挙げられていた課題である。食物アレルギーをもつ児の母親への支援を検討する上で、アレルギーそのものへの不安などを軽減させる関わりが求められると考える。

また、我が子が食物アレルギーを有していることや症状の出現に対して、子どもに対する申し訳なさを抱いていた。このような母親の持つ自責の念に対しては、疾患に対する

思いや悩みを傾聴することや、心理的サポート、アレルギー疾患に対する正しい知識を持てるような支援が必要であるとする。情報提供が少ないことや情報収集に関する困難感もあるように、母親は食物アレルギーに関して、情報が十分ではないと感じていた。情報が溢れている時代ではあるが、児のアレルゲンの種類や症状の程度などに合わせた情報提供、母親が求めている情報を得られるような、個別性のある支援をする必要があると考える。また、國武ら¹²⁾の研究によるとインターネット上の食物アレルギー情報の満足度と育児ストレスの間に負の相関が認められ、満足度が高いほど、育児ストレスが低いことが明らかにされている。このことから、個別相談ができる相談窓口での対応、ウェブサイトでの情報の充実などが有効であるとする。

2) 【食生活に関する思い】に対する支援

家庭において食物アレルギーをもつ児を含む家族の食事を用意することの多い母親は、原因食物を除去した献立の選択および準備、提供を毎日繰り返すことに困難感や負担感を感じていた。通常の食事と準備とは別に準備が必要になることへの負担感のほか、経済的な負担感もあった。また、アレルギー症状出現への不安や恐怖から、市販食品の使用にも抵抗があり、市販食品を活用できないことがさらに食生活への困難感を増強させている状況と考えられる。一方で、限られた食材や食品の利用になってしまうことや、メニューがワンパターンになってしまうような食生活を余儀なくされることから、栄養の偏りへの不安も感じていた。

これらの課題に対して、除去食の献立や安全に使用できる市販食品に関する情報提供をする必要があると考える。松谷ら¹³⁾は、食物アレルギー児の母親に対する栄養指導によって、母親がもつ不安や悩みが26～83%解消されたことを示し、特に献立変化や代替食材に関する指導を強化し、継続して実施することの必要性を述べている。近年、アレルギー対応のみならず、多様な食生活に対応する食材の開発が進んでおり、身近に手に入りやすくなったように見受けられる。選択の幅が広がることで、母親が“制限されている”と感じることを少なくし、負担感や困難感を軽減できるような対応が必要である。

また、家庭内だけでなく、外食や宿泊の際のアレルギー症状出現への不安やその予防の負担感を抱えており、そういった情報の提供を希望していた。外出先での食事に関しても、安心して安全な食事が摂られるような情報提供の機会を設けることが求められると考える。

3) 【食物経口負荷試験に関する思い】に対する支援

食物経口負荷試験への思いには、不安や期待、子どもへの思い、試験後の前向きな思いなど、試験過程によってさまざまな思いがあった。負荷試験を受ける動機には、生活上の不安や症状軽快への期待、現在の可能な摂取量を把握したいなどがあり、母親の感じる日常での困難感の改善が根底にあると考えられた。負荷試験前には、安全に試験過

程を終えられるかという不安を抱く母親が多く、この心配によって負荷試験を受けない母親も少なくないと考えられる。そこで、負荷試験を受ける母親だけでなく、食物アレルギー児を持つ母親全体への負荷試験に関する正確な情報提供が必要であると考えた。負荷試験後には、病院で行うことの安心感や、食べられたことで次の段階への期待感を抱くといった前向きな思いも示されていた。

負荷試験前には多くの母親が不安を抱える一方で、試験後には前向きな発言があることから、情報提供による不安の解消を図った上で試験を実施することが求められると考えた。また、情報提供の要望に関して、試験前は試験に臨むための心理的・物理的準備のための詳細の情報を希望し、試験後には今後の生活に関する先を見据えた情報を求めている。試験の前後で求める情報が異なることから、それぞれの過程で母親の個別的なニーズを把握し、母親が安心して十分な情報提供を行う必要があると考えられた。

4) 【アドレナリン自己注射に関する思い】に対する支援

自己注射薬を所持しておくことで安心感や期待感を抱く一方で、抵抗感や負担感を持つ母親もいることが明らかになった。飯村ら¹⁴⁾は、食物アレルギーをもち原因アレルゲンによりアナフィラキシーを体験したことのある子どもが、アドレナリン自己注射を所持することが増えてきたと述べていることから、アドレナリン自己注射を使用する患児は増加しており、注射薬に対する様々な思いを持つ子どもやその親は多く存在すると考えられる。また、宮崎¹⁵⁾は、アレルギー疾患に関して今後、養護教諭はもちろんのこと、教職員も研修を深め、アレルギー疾患の生徒および保護者・医療機関と連携しながら、学校が適切な対応をすることができるようにする必要があると述べている。エピペン[®]を所持する児やその親以外に、食物アレルギー児が生活を送る場である園や小学校においても、食物アレルギーやアドレナリン自己注射薬に関して正しい知識と理解を持つことが求められ、保育施設の職員が必要な知識が得られるような対応が必要であるとする。

5) 【子どもへの対応に関する思い】に対する支援

食物アレルギーをもつ児の母親は、子どもの食べたいという思いに応えられない困難感や、乳幼児に食物除去を説明すること、偏食の子どもに対する治療や食物除去の困難感も感じていた。これらの思いに対しては、子どもの思いや発達段階に応じた個別的な指導や助言を要するため、専門医に相談できる機会を設けること、そして児の発達段階や個々の事情に即した支援を提供する体制が求められると考える。また、食物アレルギー児本人だけでなく、一緒に生活するきょうだいや周囲の友人の理解も必要であると考えられる。齋藤ら¹⁶⁾は、学童期になると生活の場が学校や地域社会に拡大するため、家族のいない場面でも安全に過ごせるような環境を整えることが重要であると述べている。

食物アレルギーがどのようなものか、どのような症状が

出るのかなどを伝えておき、周囲が理解することで、食物アレルギー児に対して注意を促すような環境づくりを整えることができる考える。

6)【集団生活に関する思い】に対する支援

母親は、子どもが属するあるいは将来属する保育所や学校での生活にも不安や困難感を抱いていた。親の目が届かない場所で、職員がどれほどアレルギーや症状対処に理解があるのか不透明な状況であることが母親の不安に影響すると考える。玉村ら¹⁷⁾は、保育士や幼稚園教諭の食物アレルギー児やその保護者への対応における課題として、アナフィラキシー症状に対する対応への不安や自信のなさ、除去食及び誤食への不安や負担があると述べている。

このことから、保育士や幼稚園教諭に対する誤食予防やアレルギー対応の指導や支援体制の強化が必要と考えられる。そして、保育所への指導・支援内容を、食物アレルギー児の母親にも共有することで、母親が抱く集団生活における不安の軽減が期待できる。また、母親は集団生活での孤立を不安視しており、同じ病気の子どもの母親の話を知りたいという思いも持っていた。実際の集団生活を送るアレルギー児の母親などのピアサポートが受けられるよう、支援体制を調整していく必要があると考える。

7)【協力体制に関する思い】に対する支援

家庭生活および社会生活を送る上で、周囲の理解・協力が得られないことに苦しむ母親がいる一方で、理解・協力が得られている母親は安心感を抱いていた。これは、鈴木による文献検討⁶⁾でも明らかにされており、現状は変わっていないと解釈できる。秋鹿ら¹⁰⁾は、夫がFAを正しく理解し、FA児の親として家事・育児に積極的に参画することは、母親の孤立を防ぐうえで重要であると述べている。疾患を持つ子ども、そして母親の身近にいる父親のみならず、ほかの家族や身近にいる人、社会生活で関わる人の理解や協力の度合いは母親の思いに大きく影響する。また、医療者が母親の思いを受け止め共感することも母親の思いに影響し、一方では心理的サポートにもなっていると考えられる。食物アレルギーに対する理解が浸透されるよう、周囲の人たちも食物アレルギーに関する最新かつ正しい知識をもって協力できることが必要であり、疾患を持つ児の養育者や関係者のみならず、社会全体として支援体制を整えていく必要があると考える。

2. 研究の限界と今後の課題

本研究では、文献検討から食物アレルギーをもつ児を育てる母親が抱えるストレスや思いの内容を明らかにし、看護師に求められる支援策を検討した。今回は、過去10年間に発表された文献を対象に「食物アレルギー」AND「母親OR保護者」AND「思いORストレスOR心理」というキーワードを組み合わせて、医中誌WebおよびCiNii Researchを用いて対象となる文献を検索したが、検索対象の文献が

限定された可能性がある。英語文献も対象とするなど、より多くのリソースを活用して検索することで、対象文献が増える可能性がある。

食物アレルギーをもつ児の母親を対象とした研究がなされてきたが、様々な思いの中でもネガティブな思いが多く見受けられた。それらに対する支援策を検討したが、今後は支援の効果を検証する介入研究や、実際の支援内容と母親の思いとの関連をみる調査研究を行うなど、発展が望まれる。

V. 結語

我が国における食物アレルギーをもつ乳幼児の母親の思いに関する研究の現状を明らかにし、母親に対する支援の課題や研究の方向性を検討するために文献検討を行った結果、以下の結論を得た。

1. 食物アレルギーをもつ乳幼児の母親は、【疾患に関する思い】、【食生活に関する思い】、【食物経口負荷試験に関する思い】、【アドレナリン自己注射に関する思い】、【子どもへの対応に関する思い】、【集団生活に関する思い】、【協力体制に関する思い】といった面で様々な思いを抱えていた。
2. 食物アレルギーをもつ乳幼児の母親の思いの内容には、“不安”が最も多く、“困難感”、“要望”、“安心感”、“負担感”、“恐怖”、“申し訳なさ”、“期待感”、“抵抗感”、“緊張”があった。
3. 食物アレルギーをもつ児の母親に対する支援として、疾患および日常生活上の不安を軽減できる関わりや、生活に必要な具体的な情報提供、保育施設に対する教育や支援体制の強化、母親が求めている情報提供、周囲の人の理解が得られるような支援が必要である。
4. 不安や困難感といった母親が抱く思いに対して、支援策を検討するとともに、支援の効果を検証する介入研究や、実際の支援内容と母親の思いとの関連をみる調査研究を行うなど、発展が望まれる。

利益相反 開示すべき利益相反はありません。

引用文献

- 1) 東京都健康安全研究センター. アレルギー疾患に関する3歳児全都調査(令和元年度)報告書. 2020.
- 2) 今井 孝成, 杉崎 千鶴子, 他: 消費者庁「食物アレルギーに関連する食品表示に関する調査研究事業」平成29(2017)年即時型食物アレルギー全国モニタリング調査結果報告. アレルギー, 69(8): 701-705, 2020.
- 3) 手島 聖子, 原口 雅浩: 乳幼児健康診査を通じた育児支援 育児ストレス尺度の開発. 福岡県立大学看護学部紀要, 1(1):15-27, 2003.
- 4) 立松 生陽, 市江 和子: 食物アレルギー児の母親における育児ストレスと家族対処についての研究. 日本看護研究学会雑誌, 30(2): 119-128, 2007.

- 5) <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukinto-ujidoukateikyoku/0000067539.pdf> (2023-3-1)
- 6) 鈴木 美佐：日本における食物アレルギー児をもつ母親に関する研究の現状. 聖泉看護学研究, 2 : 103-110, 2013.
- 7) https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=78ab4117&dataType=0&pageNo=1 (2023-3-1)
- 8) <https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000476878.pdf> (2023-3-1)
- 9) 宮城 由美子, 高橋 みどり, 他：食物アレルギー児に行う除去食が家族・きょうだい児に及ぼす影響について. 外来小児科, 13(3) : 306-309, 2010.
- 10) 秋鹿 都子, 山本 八千代, 他：食物アレルギー児を持つ母親の主観的困難感と看護者に望むもの. 小児保健研究, 70(5) : 689-696, 2011.
- 11) 有瀧 薫, 稲葉 千里, 他：食物負荷試験入院での母親の不安軽減への試み. 日本看護学会論文集小児看護, 37 : 291-293, 2007.
- 12) 國武 加奈, 林 大輔, 他：食物アレルギー児の母親における育児ストレスとインターネット上の食物アレルギー情報に対する満足度に関する研究. 障害科学研究, 46 : 41-49, 2022.
- 13) 松谷 智子, 藤田 麻奈美, 他：食物アレルギー患児をもつ養育者の不安悩みと外来栄養指導後の解消. 日本小児臨床アレルギー学会誌, 16(3) : 371-375, 2018.
- 14) 飯村 万理恵, 内野 祐子：アドレナリン自己注射薬を所持する子どもの実態調査. 第45回日本看護学会論文集 慢性期看護, 44 : 168-171, 2015.
- 15) 宮崎 恵美：私立女子中学校におけるアレルギー疾患をもつ生徒への取り組み. 小児看護, 35(6) : 746-751, 2012.
- 16) 齊藤 千晶, 石川 紀子, 他：食物アレルギーをもつ学齢期にある小児と家族の食物除去の解除過程の体験と思い. 日本小児臨床アレルギー学会誌, 15(3) : 369-376, 2017.
- 17) 玉村 尚子, 横山 由美：保育士・幼稚園教諭の食物アレルギー児やその保護者への対応における課題と支援体制に関する文献検討. 小児保健研究, 81(1) : 59-67, 2022.

【Material】

**Literature review on the thoughts of mothers
with food allergic infants**

FUKA NISHIYAMA^{*1} MAMI MIYANO^{*1}
SHIZUKA TAKAMAGI^{*2} MIA HASHIMOTO^{*2} AYAKO OHGINO^{*2}

Received September 4, 2024 ; Accepted September 23, 2024

Abstract: A literature review of 13 articles was conducted on the thoughts of mothers of infants with food allergy. As a result of extracting and categorizing descriptions of mothers' thoughts, seven categories were found: [thoughts about disease], [thoughts about diet], [thoughts about the food tolerance test], [thoughts about epinephrine self-injection], [thoughts about dealing with the child], [thoughts about group living], and [thoughts about cooperative system]. The most common emotion was "anxiety," followed by "difficulty," "requests," and "relief," in that order. Mothers caring for children with food allergies had a variety of feelings, mainly negative feelings, such as difficulty and burden in eating habits and anxiety about group life, in addition to feelings about symptoms of the disease, tests, and treatment. We believe that it is necessary to provide support for mothers by engaging them in ways that reduce anxiety about the disease, strengthening the provision of information and counseling, and strengthening support systems for childcare facilities and people around them.

Keywords: Food allergy, Infancy, Thought of mothers, Literature review